

二宮尊徳さんにももの申す！

教員の身であるが故に、巷で見かける場所や建物に興味をひかれて、ついつい注意深く目にする対象は、もちろん“学校”である。

この学校は、「きれいな校舎だ」「体育館が狭そう」「敷地は広いなあ」「桜の木がたくさんある」「グラウンドの水はけが悪そう」など、見た目やハード面を眺めながら、その学校の生徒や先生方の様子に思いを巡らす。

そんな中、時々懐かしいものに出くわすことがある。それは、「二宮尊徳（金次郎）」の石像である。そう、あの、薪を背負いながら本を読んでいる姿の石像だ。明治時代に、勤勉・勤労の象徴として特に小学校に多く建立された。そして職員玄関脇など学校の顔と言える所に凛として立っていた。

しかし、二宮尊徳が本当に薪を背負いながら本を読んでいたという真偽は不確かなことで、現代の教育観にもマッチしないこともあり、石像は全国的に徐々に撤去され、その数はかなり減少しているらしい。

それはさておき、二宮尊徳さんの姿は、逆の見方をすれば、本を読みながら薪を背負っていたとも言える。そこで、かつて読んだ本（書名失念）の中の次の内容を記憶している。本の筆者と二宮尊徳の架空のやりとりである。

- ◇筆者「本日はこのような機会に恵まれ光栄です。この頃めっきりあなた様の姿を学校で目にするのが少なくなり本当に寂しい限りです。」
- ◆二宮「仕方がない。これも時代の流れだ。」
- ◇筆者「ところで、あなた様は、本当に本を読みながら薪を背負って仕事をしていたのですか。」
- ◆二宮「私は嘘をつかない人間だ。だからこそ私は石像になっている。」
- ◇筆者「私の考えでは、薪を背負って読むよりは下ろして読む方がずっと効率的な気がするのですが。本を読みながら歩くことは、山道で転んだりして危険ではないですか？第一くたびれながらの読書がそんなに身になるとは思えないのですが。」
- ◆二宮「私たちの時代（1800年頃）には電気はないし、油は高く買って買えないし、本が読めるのは昼間だけだった。仕事をしなければ食べていけない状況だった。今のように恵まれた時代ではなかった。」
- ◇筆者「しかし、お言葉を返すようですが、そのために道中の花を見落としたり、小鳥のさえずりを聞き逃したりすることを残念に思うことはありませんでしたか？」
- ◆二宮「花や小鳥だって？」
- ◇筆者「そうです。人生には学問や勤勉さよりも大切なものが、他にもたくさんあるような気もするのです。」
- ◆二宮「恵まれた時代だからこそ、そんなことが言えるのだよ。」

◇筆者「少なくとも薪を背負って本を読むよりは、薪を下ろして読む方が身に入ります。読書は人生の楽しみであって義務ではない。そのために山道の往復回数が減って怒られても構わないじゃないですか。山道を歩くときは本を読むのではなく、“山道を読む”べきです。自然は何よりも偉大な書物であるというのが私の考えです。」

◆二宮「生意気な意見だ。私にももの申すなど200年早い。」

さて皆さんなら、この二人のどちらに軍配をあげるだろうか。価値観や生き方は人それぞれ違うわけだから、双方が生きた時代や立場も考えると、どちらの言っていることも肯定も否定もできない。

また、別な私の記憶として、昭和の時代にテレビの脚本家として名を馳せた二大巨頭である山田太一（代表作：TBS「ふぞろいの林檎たち」）と倉本聰（代表作：フジテレビ「北の国から」）との、ある対談での次のようなやりとりがある。

◇「私は、100人の人間に出会うより、最高の1冊の本と出会えることの方がいい。」

◆「私は、100冊の本を読むなら、最高の1人の人間と出会えることの方がいい。」

さて、これについては、二人のどちらに賛同するだろうか。これも人それぞれだろう。どっちがどっちの見解を述べたかは覚えていないが、ただ、この二人に限っていえば、山田氏も倉本氏も平均的な水準と比べれば、遥かに膨大な書物を読む読書家であり、かつ、公私ともに多くの親しき友人知人がいるという高いレベルでのやりとりであることは言うまでもない。

さて、私がこの2つの話を通して言いたかったことは、子どもたちには、ぜひ、3つの「出会い」を大事にして生きてほしいということだ。それは、「“本”との出会い」、「“人”との出会い」、「“自然”との出会い」である。

自分が貴重な時間を費やす内容が、人生の楽しみであろうと、人間としての義務や権利の行使であろうと、仕事であろうと遊びであろうと、その人の考えは自由なわけだから何でも構わない。

ただ、自分を成長させ豊かな人生を送るためには、私たちは常に「“本”を読み」「“人”を読み」「“自然”を読み」生きるべきだと思う。

そして、その一方で「優先順位」も大切にすべきである。言い換えれば、「今、一番に、何をすべきか」ということだ。

ゲームをしたっていいんです。病気にならない程度であれば。スマホでSNS やったって結構なんですよ。人を傷つけたり罪を起ささない限りは。やめなさいと言ったって、どうせやめられないでしょ。でも、その限度と、自分が今置かれている状況を考えられるようにならないとです。保護者はもちろん、林修先生にも、ぜひ叫んでもらいたい。「今じゃないでしょ」と。

2010年代に入り、二宮尊徳像は、スマホ歩きを助長するという批判がわき起こり、ある地方の地域団体は、座っている姿の二宮尊徳像を地元の小学校に寄贈したということが話題になった。ただ一つ言えるのは、二宮尊徳がたとえ薪の荷を下ろし道端に腰をおろして読書に集中していたとしても、200年後の今の世の中の姿を読み通すことは到底できなかったに違いない。